

## 第 19 回スタディーツアー報告記

事務局 高橋真弓

2012 年 11 月 24 日(土)

ベトナム航空 357 便 福岡→ハノイ→ルアン  
ンプラバン。参加者 10 名、ハノイで乗継の  
ために約 6 時間過ぎルアンンプラバンへは  
現地時間、夜 8 時頃着。ナイトバザールを  
散策しながらメイン通りのレストランで軽  
い食事。時差が-2 時間あるため、時計は  
10 時でも日本は夜中 12 時。眠いはずだ。

11 月 25 日(日)

学校が休みのため、今日は市内観光。  
ホテルがメイン通りに近く、私の部屋は市  
場が開催される道路側だったため朝 5 時が  
過ぎるとバイクの騒音で目覚める。他の人  
はワットマイ側、鐘の音で目覚めたらしい。  
薄靄の中、待ちきれなくて散歩へ。まだ準  
備中の活気溢れる前の市場を通り抜けると、  
敬虔な仏教徒が多いラオス人の日常の朝の  
風景、托鉢に遭遇。朝食後は、王宮博物館  
を全員で見学しその後は自由行動に。大学  
生達はレンタサイクルで街を回り、私は一  
人で街を散策。女性の一人歩きも平気なの  
がラオスのいいところの一つ。

11 月 26 日(月)

今日は、町から約 2 時間離れた Nambak 郡  
の 2 小学校視察へ。川内ライオンズクラブ  
が建てた学校で、モン族の村の学校の生徒  
数がかなり増えていた。上級生が隣村に行  
っていたのが、教室ができたので村に戻っ  
てきたのだ。ライオンズクラブからノート、  
ペンをプレゼントし、じゃっどは「てをあ  
らおう」絵本を読み聞かせしてからタオル  
も一緒に供与した。2011 年竣工記念に植樹  
した木が成長していて嬉しかった。



夕刻から王宮博物館横シアターで伝統舞踊を観劇。

11月27日(火)

ルアンプラバン→空路ビエンチャンへ移動古田理事合流。通訳を待てども連絡つかず、そのうち専用車のドライバーも帰ってしまいトゥクトゥクを交渉して、夕方4時にしまるパトゥーサイにぎりぎりセーフ。屋上から見下ろすビエンチャンの町並みは緑豊か。祭りの影響で車が多い。



11月28日(水)

タートルアン祭りの朝。Dr.Kongsap が用意してくれた托鉢用品一式をかかえ、到着した頃は既に読経が終わり、国中から集まった僧侶、敬虔な仏教徒、観光客など行く人と帰る人でごったがえしていた。僧侶は寄進された御飯、卵、お菓子、お金などを大きなポリ袋にごちゃまぜに入れ、まるでサンタのように担いで帰る姿も見受けられた。寺院に入るには女性はシン(ラオスの巻スカート)を着用していなければならない。ジーンズ姿の私だけが外で待つことに・・・と思いきや、しっかりとレンタル屋さんがあって 40,000kip で貸してくれた。その後ビエンチャン最古のワットシーサケット、道路向かいのホーパケオ(博物館)を見学しその後タラート(市場)へ。新しくできたビルディングのトイレは有料(50円くらい)で入り口にいる係員にお金を払ってから紙をもらうシステムだ。



11月29日(木)

対象校視察、ナテ村で式典。前日が雨だったせいか、ぬかるんだ赤い舗装してない凸凹道を揺られ、市内から約90分、ナテ村小学校へ。子供たちが校庭で両国の国旗を振って出迎えてくれた。感激。



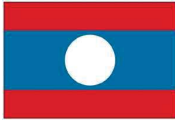








**ສະບາຍດີ.**



**20 周年式典 IN LAOS**

**於：十元村小学校**



私にとって今回のラオスがはじめて行く発展途上国と呼ばれる国でした。今まで行ったことのある国々にあるような高層ビル群や繁華街、ビーチ、歴史的建造物などのない「貧しい国」、それが、私がラオスに行く前に持っていたイメージでした。この旅行の後、私は「貧しい」ということについて考えが変わることになります。まず、最初についた都市はルアンパパンと呼ばれる都市で、表面上はにぎやかに見えるけど実際は外国人観光客がメインストリートを闊歩しているだけで、「作られたラオスらしさ」しかないただの観光地でした。ビエンチャンもそうです。ただの発展して、発展するにつれてありきたりな都市に近づいているような気がしました。この二つの都市だけをみただけならわざわざラオスまで足を伸ばさなくてもバンコクやハノイで十分だったな、と感じたでしょう。私の価値観を変え、最も感動させてくれたのは、観光地から車で塗装もされてない道を1, 2時間走ったところにある村でした。この村にあるものがルアンパパンやビエンチャンにない“リアル”なラオスだったと思います。もちろん最初は、でこぼこ道に揺られ、車窓から見える風景を見て、水洗トイレもない、電気もない、ティッシュもないことに驚き「やっぱり貧しい国なんだな」と考えていました。そして、いざ村につき、学校につき、村の人々とお酒を飲み、子供たちとサッカーをするなかで、私が今まで考えていた”貧しさ“というものを人々から全く感じないことに気づきました。いままで、いろんな国々の路上の貧しい人々を見てきました。私が一年生活していたトロントでは、いたるところに紙コップを持ってお金をせびる人々がいました。いままでそういうものを見てきてわたしは「貧しさ」には「悲壮感」が付きものであり、「貧しさ」とは物資がなく、”先進国的生活“がおくれないものだと思っていました。しかし、村でそういった「悲壮感」も感じることはなく、むしろ、村の先生や村長、保護者の方々、子どもたちが一緒になってワイワイ学校に集まっているのを見て言葉にできない”豊かさ“を感じました。確かに、村にはインターネットはないでしょう。テレビもない、水洗トイレもない、自販機もない。”先進国的生活“は皆無でしょう。しかし、そんなラオスの村をみて、どうしても私は”貧しい“と感じることはできませんでした。むしろ、コミュニティを大事にし、助け合い、人に親切にすることを忘れないラオスの村が、発展と豊かさとともに古き良き伝統を捨ててきた日本より豊かに映ったほどです。ここで私の”貧しさ“と”豊かさ“に対する考え方が変わりました。ラオスは間違いなく豊かな国です。先進国が発展とともに捨てた”豊かさ“をいまだに持っています。物資の豊富さだけが豊かさではないこと、先進国の人から見た”貧しさ“というものが決して”貧しい“ということではないことをラオスの村は教えてくれました。このラオスへの旅は今までで一番私の価値観を変えてくれたものであり、一番貴重な体験となりました。機会があればもう一度、ルアンパパンやビエンチャンではなく、ラオスの村々を訪れたいと思います。



## ラオスにいったかんじたこと

時村兼輔

11/24 日私は、福岡空港からラオスにむかった。ボランティアをするためだったが、ボランティアなどほとんど経験がなく、ましてや海外旅行なんて初めての経験だったので自分につとまるのかと悩んでいた。出発前は、ラオスという国についてはあまり知らなかったというのが正直なところで、発展途上国ということだけ知っていたので治安や食べ物、病気と不安が絶えなかった。そして数時間後、ハノイからの乗り継ぎでそこで人生初めてのプロペラ機での飛行を体験した後ラオスについてからワクワクがとまらなかった。ルアンプラバンについたのはすでに夜だったが、ナイトバザールは、日本にすんでいるとなかなかみられなくて新鮮でなにより観光客も多いことに驚いた。ラオス初の夕食は筋張ったステーキだったがあのステーキにビアラーオはやみつきになりそうなくらいおいしかった。おかげで私は初日でラオスの魅力にはまってしまった。

ボランティア活動のほうは、最初は緊張してうまくうごけなかったが、子供たちと接していくうちにだんだんと慣れてきた。礼儀正しく受け取ってくれたり、笑顔をみせてくれたり、もらってからすぐ使ってくれたりして正直とても楽しかったし、やりがいもかんじた。校舎も想像していたよりずっときれいで、子供たちの作品などがざついているところなどおいてある備品なども日本の学校と変わらなく驚いた。しかし最初のほうにいった学校などはトイレの環境があまりよくなかったので衛生面で少し不安を感じた。未来のラオスをつくっていく人たちなのでこれからも勉強をがんばってほしい。ラオスの子供たちはすごく元気でほんとうに楽しかった。一緒にサッカーしたとき、サッカーボールたった1個で友達になれたことはたぶん一生忘れることができないくらい私の心に刻まれた思い出です。

今回のラオス旅行、私はとても楽しかったです。王宮博物館の見学、ナイトバザール、タートルアン祭り、ラオス式凱旋門などいろいろなところを見学させてもらい、その都度丁寧な説明でその観光名所の説明をしていただき、とても勉強になりました。質問などにもいろいろ答えていただき充実した旅行でした。また個人的にラオスにいったとき友達にもおいしいお店やおすすめの観光スポットを説明できそうです。これもじゃっどのみなさんのおかげだとおもいます。気難しい大学生三人いろいろ迷惑かけたとおもいますがボランティアから観光にいたるまで面倒をみてくれたことにととても感謝しています、ありがとうございました。

今回のラオス旅行でラオスに対するイメージが旅行前とまったく変わりました。発展途上であることは変わりませんが衛生も日本ほどありませんが、それでもなおひきつけるラオスの魅力をかんじました。子供たちも誠実で元気があり一緒にいて楽しかったです。異国の人とふれあいがこれほど楽しくかんじられたのもじゃっどのみなさんのおかげだとおもいます。素敵で貴重な体験をありがとうございました。

## ラオス研修旅行報告

在:神奈川 木場貞成

前泊予定の福岡ではホテルが取れず熊本に前泊するという異例の旅行になってしまったラオス研修旅行。旅行中にもいくつかのハプニングがあり旅の印象を強烈にした研修旅行でもあった。出発が急遽、別便になった参加者がいたが、30 時間後には何もなかったように全員がスケジュール通りの行動ができたし、また帰国日になって参加者の一人がパスポートを盗まれるという事件が発生したが、これまた海外では例がないと思われることが起き4 時間後には予定通り全員そろって帰国便の搭乗手続きが出来、何事もなかったように帰国出来たのである。人を助ける人はまた人に助けられる。まさにそのとおりであった。

ところでラオスはたびたび訪問していたが、研修旅行で訪れるじゃっどの支援している小学校はもちろん初めてであり、途中の道のりは 10 年ほど前に通ったことがある道ではあったが、今や道路状態といい、交通量といい、10 年前とは雲泥の差があり、改めて都市のみでないラオスの発展ぶりにびっくりの連続であった。

訪れた小学校も想像していた以上で、10 年ひと昔ということがラオスにも感じられ、戦後の日本の発展ぶりとは何か共通するところを感じられた。

じゃっどの支援が学校発展に寄与していることが身をもって感じられたのは、学校が良くなっていることと共に、訪問した学校では生徒が列をなして我々を迎えてくれていたし、先生や父兄が皆集まり、それこそ村をあげての歓迎会を開いてくれていたことでも十分わかった。



今回のハイライトの一つである寄贈した机に名前を書き入れる行事は、手分けしてそれぞれの学校に行ったため、自分の名前こそ書き入れなかったが、あとで自分の名前の入った机とそこで勉強するであろう子供達と一緒にしたら何か今までに感じたことのない嬉しさがこみ上げてきた。この立派な机で思いっきり勉強して立派な大人になってほしいと願わずにはいられなかった。何年か後には再度訪れてみたいものである。

今回の研修旅行で感じたことは、百聞は一見にしかず、現地で触れ合い我々の援助がどう役立っているかを知ると同時に、今後は彼らが自助努力するようにどう援助していけばいいのかを考える必要もあるなあということであった。